



2018～2019年度 全国学力・学習状況調査結果の分析から、学力向上とその授業の要件について、明らかになったことを示す。

I 言語活動の基盤としての学習規律の確立

第1点は、言語活動の基盤としての学習規律が確立していることである。言語活動を円滑に成立させるためには、最低限の授業ルールなど、学習規律の確立が必要である。「チャイムが鳴ったときには、授業の準備が整えられおり、着席している。」「先生や友達の話を最後までしっかり聞く。」「話すときは相手の方を見て話す」などルールが共通理解・共通実践されることが重要である。

II 信頼関係の構築

第2点は、学級内の人間関係において、信頼関係が構築されていることである。グループ活動や話し合いは、日頃の良好な人間関係があって効果が高まる。「間違ったことを言っても笑われない。」「助けが必要な時は助けを求めていい雰囲気がある。」「分からないときは『分からない』といってもよいと子供たちが感じている。」といった様子からうかがえる信頼関係は、子供たちを積極的に学びに向かわせる力になる。

III 表現力を高める指導の充実

第3点は、授業で「児童が調べたことや考えたことを分かりやすく話したり、書いたりする指導」の充実を図ることである。

⇒ 例えば、随所に「書かせる活動」を組み込むことである。日記、読書記録、本の紹介、新聞づくり、行事報告、条件作文、生活作文、新聞コラムの写し書きと、意図的・計画的に「書かせる」機会を設定する。また、教科を問わず、少人数のグループ学習も積極的に取り入れ、話し合い活動を円滑に実施していくことが大切である。

IV 「めあて」の設定・「振り返る（メタ認知）」場の設定

第4点は、授業の冒頭に「めあて（具体的行動目標）」を児童に示す活動を設定することである。また、授業の最後に学習したことを「振り返る（メタ認知）」活動を計画的に取入れることである。

「めあて」は、「授業のゴールの姿」であり、具体的行動目標で示す。具体的行動目標で示すことにより、自己評価、相互評価、他者評価が可能となる。やがて「めあて」を児童自身で設定できるようにする。

「振り返る（メタ認知）」場とは、自分自身の学びを落ち着いて見つめ直すことで……

①「めあて」を達成することができたのか、②何が身に付き、何ができるようになったのか、③どのように問題を解決していくか、④「学び」を生活にどう生かすのか、⑤新たな問い、学習問題を発見すること……である。

※「めあて」の設定と、「振り返る」場の設定は、セットで効力を発揮する。どちらかでは効果が半減するところか、1/3になると、いわれている。